plus minus petaloides sterilibus. Carpella floris primarii sunt sepala floris secundalii, foliacea, 2 rarius 1, 13 mm longa 4—6 mm lata, serratula apice plus minus rubescentes anthennaeformes, extra alabastrum projecta basi stipitata, stipibus 5 mm longis. Flores secundalii, petalis ad 13 (1—13), leviter roseis vel albis, 2—12 mm longis, staminibus 1 vel 2 rarius ad 5, filamentibus brevibus saepe 0, pistillis filiformibus albis, vel foliaceis et viridis.

Nom. Jap. Kusima-zakura (nov.) Hab. Kyûsyû. Prov. Hizen, Ômura Kusima, in horto templi culta (S. Toyama 18 Apr. 1947—Typus in Herb. Univ. Tokyo).

○キイレツチトリモチの長崎における再發見（外山三郎）

キイレツチトリモチ *Balanophora tobiracola* Makino は明治 43 年，薩摩産の材料によつて記載されたものであることは周知の事實であるが，田代善太郎，山崎又雄兩氏はその前，明治 40 年 12 月 1 日長崎市飽浦の雜木林内でこれを發見された。その標本の一部は今私の手もとにもある。田代氏がかつて私に語られたところによればその産地は，長崎港の西側にある飽浦の海岸から峠をこして福田に通ずる細い舊道の北側，峠の附近で，しかも峠の東側即ち長崎港に面しシャリンバイのしげつたところであつたという。しかるにこの舊道はその後改さくされてバスをも通すほどのものとなつたが，この道路工事の際發生地がけずりとられたため，この兩氏以外に同地でこの植物を採集したものはなく，全く絶滅したものと思はれていた。ところが高橋貞夫君は昭和 16 年 11 月 3 日，長崎港の北東にある本河内の雜木林内で主としてトベラ，稀にネズミモチ，極めて稀にシャリンバイに寄生している本種を發見され，こえて昭和 18 年 12 月 29 日，今度は田代，山崎兩氏によつて發見されていた飽浦で再發見された，その場所は特にこゝでは詳言しないが，ともかく兩氏初發見の所から極めて近い地點である。先年私も高橋君の先導でこの兩地に現物をみることができた。ついで昭和 20 年 10 月 24 日，今度は高橋君の教子である長崎中學生の中谷保行，杉本隆介，藤野充の三君が長崎港の南東にある愛宕山でトベラに寄生している本種を發見，更に昭和 21 年 11 月 12 日，高橋君は長崎港の東にある彥山でネズミモチに寄生している本種を發見された。即ち田代，山崎兩氏發見後凡そ 40 年，本種の分布北限である長崎港をかこむあちこちの山々でつぎつぎに發見されたことは愉快なことである。しかし最近燃料不足のためこれらの雜木林はいつ伐採されるかわからぬ運命にあるのは心細いしだいで，今のうちに何とかしておきたいものと思う。

○マルバママコナが壹岐にある（外山三郎）

マルバママコナ *Melampyrum ovalifolium* Nakai は中井博士が朝鮮元山に産するものを原品として記載されたものであるが，まだ内地に産する記錄をみない。ところがこれが長崎縣の壹岐にある，壹岐の島では勝本，箱崎，那賀など島の北半の樹陰や路傍

には極めて普通で，花は七月中旬ごろから開きはじめる。

○オウクグは九州まで南下している（外山三郎）

北方系の海岸濕性植物であるオウクグ *Carex rugulosa* Kuekenth. は北海道から南下して出雲まで產することが知られていたが，昭和17年8月，私はこれを長崎から西南に突出する野母半島の中部に位する西彼杵郡川原村の大池のほとりで，フサスゲや，カサスゲなどと多數群生する本種をみつけた，目下のところ九州唯一の產地でかつ本品の南限であろう。

○イヨトンボは九州にもある（外山三郎）

イヨトンボ *Peristylus iyoensis* Ohwi は大井博士が初め四國產のものを原品として記載された稀品であるが，その後まだ九州に產する記錄をみない。ところが昭和21年9月私はこれを長崎市外喜々津村で採集することが出來た，產地は大村灣に近い山足にある水田附近の草地である。

○寺崎留吉先生略傳（松崎直枝）

私が廣島に產れた明治廿二年に寺崎サンは植物園に勤めて居られた。其時は中井博士の父上堀誠太郎氏が居られた。寺崎サンと中井先生と私は此んな關係もあるので植物園出身の私の先輩たる寺崎サンを失つた今其略傳を私が背負ふのも或は後進の私として當然かも知れない。

あの日本で最も誇り得る圖譜の著者，明治から昭和年間の一種の名物男であつた人は明治四年に大阪北區老松町に產れ，衣笠小學校在學中も朝顔の寫生を初めて居り，チンダリア（ハルシヤギクの種名チンクトリアの轉），タナセタム等を栽植したりし，大阪中學では論語，植物學はグレイ，地理はスキントン等を學び，明治二十二年二月六日に小石川植物園に勤務二十五年，理科大學簡易科卒業し杉浦塾に入りて更らに專科生を終了後，其全生涯を杉浦重剛先生の日本中學に一貫し其の採集の手初めは植物園より志村に至りしを筆頭にして，北は千島及樺太，南は臺灣，東は小笠原更らに滿鮮及南支は香港に及び到所寫し來る所四千種は日本植物圖譜となりて昭和八年は十三年に續編を以て世に問ふに至り，流石に小學時代よりの彩管は其自然科學の智識と相俟ち相助けて世界的名著とはなりしものの外，其の動物學的研查の如き特に蟹の所說の如きは堂々たるものにして遠く餘人に及ぶ可らざるものありと聞く。身は一介の私立中學の教師に終止して不朽の名著を自ら寫生し自ら記述し老を忘れて更らに續々篇も殆ど板木に成りて校正の二千圖となりて完成せずに小石川植物園近く陋屋に爆彈の音を聞き乍ら永眠せられし事惜しみても餘りある事にして，教育界は木杯を或は銀牌を贈られて褒賞せしも故なしとしないが，氏の殘せる植物學界の圖說の足蹟の如きも氏の右に出づる者あらざる可く，遠からず氏の晩年老齡を忘れて寸陰を惜しみて努力を續けられし續篇も刊行の運びに至る可く氏生前の約もあり不肖校正にあたる豫定なり。尙藏書は松原教授（現校長）の厚意により全部を岡崎高等師範學校の所藏に屬せしめたり。